

第十八号 八月二十三日発行

東大斗争

獄中書簡集

あの金網を離れこもどつていくのは
鎌田さんには

拡散する、太陽の輝く世界であり
ぼくには

独房へと収れんする
重い通路。

第 18 号

目 次

- 一、 七月一九日 東拘より……………三井 董……………一
- 二、 七月二五日 “……………夏目三石……………五
- 三、 七月某日 小 普……………鈴木琢郎(斗委)……………一三

撃のとき)だの『中核派、内部分裂?』だの、あらぬことを書き
たてるし、『赤旗』は『赤旗』で、モノスゴイ攻撃するし、おま
けに『反スターリン主義本家?』の革マルまで、一緒になつて:
という具合。でも、獄中学生の約七割を白ヘルが占める、という
今において、『最大の派閥』(いやな言葉だけど)というのは、
やはり、最もよく斗かう者、を大衆は知つてゐる、ということであ
り、レーニンの『革命的理論なくして革命の実践はありえない』
という言葉の現実的証明でもあるでしょう。

パクられてもパクられても、ちつとも減らない。逆に増える。
と言うのは、権力にとつても、また他党派にとつてもすこぶる不
愉快なことだらうけど、でもこれはほくたちの堅固な組織性の故
であり、また、『革命のダイナミズム(ちよつとオーバーかも)』
でもあるでしょう。

なんだか、自慢タラタラで、いやらしいですね。でも、ついで
に言わせていたただきたいのだけど、鎌田さんは『前進』なんて知
つてますか? 是非、是非、読んでいたただきたいですね。

これは『自分のセクト』だから言うのではないのだけど、『前
進』というのはスゴイ新聞です。

牢屋で読むようになってから、つくづくそれがわかりました。

七月七日(月)の『前進』は、6ページ(いつもは4ページ)
で、第六面には、2¹/₂位が「沖繩4・28から全軍労ストへ——帰京
した石田郁夫氏に聞く(上)——」という、興味深い記事があり、1¹/₃
位が、「破防法に反対する——破防法と自己決定権」という梅本
さん(梅本克己)の論文(?)があります。

この梅本さんの記事はとてもおもしろい。たとえば『そこで彼
らは羽仁五郎をカモることが出来るか? 出来ない。』なんて文
があります。

第五面には、2⁵/₅位に、10・21騒乱罪裁判の記事。これもおも
しろい。(とても)騒乱罪がどんなにバカげた「法」であるかと
か、バクロしてる。「おもしろい」と言う時、意味深い、という
のと、可笑しい、という二つの場合がありますね。

ここで使つたのは前者の意味でなのだけで、後者の場合を探す
と、たとえは、こんな文。

『つけ加えると、この播本裁判長という人は非常に頭の良い人
で、まさに天才以上である。』

被告の発言に対して、その被告がまだ一声も発しないのに「君
の言わんとすることはわかっているから発言を禁止する」などと
いう……云々』

ほくは、新聞のセールスやるつもりも、また、鎌田さんに『前
進』読ませてRしようなんてことは、全く考えてない(失礼です
が、ほくは女というものは決してORしないことにしています。)
のだけど、ひとつの素晴らしいものを知つてゐる人間の『普遍性』
として、あなたにも是非読んで欲しいです。

——ただ、このすばらしい新聞機関紙も、11月で、多分、非
合法になるのではないかと思うと、嬉しいような、辛いような:
(御存知、11月決戦、佐藤訪米阻止で、破防法機関紙停止など。)
11月について言えば、破防法ブラス騒乱罪も、出てくるでしょ
う。各大学、各反戦の指導的部分にすべて逮捕状……なんていう

「おもしろい」時代に入るでしょうね。ぼくなんか、8月ゴロ、やつと出て、11月に、またバクられるつてのは、余りといえはあまりではないか、と考え、11月おれるまで、ここに断固、踏みとどまつていようかな、なんて考えています。

こういうのは、「革命的日和見主義」と言つて……レーニンも……なんてのはウソですがね。

獄中書簡集のことだけど、べつに、先の二通だつて、出して下さつて構わないですけど（どうぞ出して下さい）——ぼくはあんまり、あれ（書簡集）好きじゃありません。（これは一面的なイミダ）

なんだか、欲求不満を、自己発現しているつて感じてね。でも、読んでるととてもおもしろい。最近、白ヘルの学友の文がふえたので余計おもしろい。白ヘルの同志は、みんな、なかなかいい文を書きます。

◎ 泣くという行為があれ、なら、ぼくは泣いたのだろう。

『六月五日。——早いもので、一・一八、一九の東大斗争でバクられ彼岸の亡者になつてから、既に四カ月半以上の月日が流れてしまいました』この文だけを残して、全部、墨で消された学友（第10号6月21日号）

書簡集をペラペラめくつていて、このまつ黒なページを見て、ぼくは、——なぜだかわからないのだけど、たまたまなくなつて、涙をいっばい流した。

この学友をぼくから奪つたヤツは、この学友を墨で抹殺したのは！

やつと涙がとまつてから、ぼくの胸には、この墨よりも、もつとドス黒い憎悪。憎悪。激怒。復讐。炎をあげて燃えるほどの復讐。必らず。

運動。

30分。

銀白色の太陽のもと

汗がコメカミからあごへ伝い

小さな大地はそれをやわらかく吸いこむ

もう夏も半ばでは

あの時は

真冬だつた

はじめての火炎ピンは

足がふるえた

ぼくの血は

あごを伝つて

赤いジュータンにおちて

きれいだった

セミが鳴きはじめる午後

あの時は

ヘリコプターが

ぼくには見えなかつたが
羽音をたてていた

泣いた

くやしくて泣いた

誰も涙は知らない

血はもつとたくさん流れてたから

赤い血が

頬からあごを伝つて

床におちる

30分。

終わつた

まだ終わつてない！

69・7・18

これを「詩」なんて言わないで下さい。ぼくは「詩」なんて書きません。

(わざわざウラまで書いて便箋一枚ケチろうと思つたけど、破産しました。)

アイス・クリームが喰べれるのです。街で売つてる30円の「S
NOW」のヤツ。アイス・クリーム券というのを購入して前の日
に、わたすと、次の日の二時半ゴロ配つてくれます。(二時半か
ら三時までラジオかかる。)

三日程前ですが、アイス・クリームなめてたら、セルジオ・メ
ンデス&ブラジル66の「ワン・ノート・サンバ」がきこえてきて、
—その時、なんだか「シヤワセだなあ：：」なんて感じました。
これは「唾棄すべき日常性」というのではなくて、たぶん、極
く自然な感情なんです。

夏の昼下り、ボサ・ノヴァが軽やかに流れ、アイスクリームを
なめる：：という、(考えたら、バカみたいだけど：：)なんだ
か夢のようなノンビリした時間——理念の国への旅——夏の昼下
り、というの、ちよつと「魔」的な時間です。

音楽の話。東拘で、ローリング・ストーンズがきけるとは思つ
てなかつた。「PAINT IT BLACK」。

そしてビートルズは何年ぶりだつたらう。YESTERDAYO思
わず一緒に歌つていた。拘置所のオリの中でビートルズはナンセ
ンス？ そんなことない。ぼくは断固として「生きてる」から。

今、流行つてるのは(独房で)新谷のりこの「フランシーヌの
場合」ぼくもまた、この歌に、時には熱い涙を流すことも：：。

ぼくたちの世代。ビートルズ。ローリンズ・ストーンズ。ヤンマ
ンズ。PPM。サンモン&ガールファンクル。そしてここにひとり
の暴力学生。斗かうぜ！

燃える斗志で、熱いスクラムを組み、みんなと高らかにイン
ターをうたえるのは何時？

(七月十八日夕方)

この前の手紙で「他党派批判の態度について」若干書きまじたが具体的引用がなくてどうもツツキリしなかつたが獄中書簡集13号の「中核派の『大学斗争』論批判」が他党派批判の最も悪いしかたの典型を示しているのを引用しつつこの前の論を發展してみようと思う。前進社発行の「大学斗争」を読んだと称するこの人の名を仮に「ヤブ君」としておこう（その理由は後ほど）。さてヤブ君は「中核派は精神労働者の社会的隷屬を全くみることができずインテリの良心に訴え自己をマルクス主義者として聖別し人民を救済せよと叫んでいる」と勝手に決めつけさらに「中核派は解放派の産協絡線を個別資本と研究室との結びつきとして扱っている」といつて「帝大解体」のスローガンは大学を外からしかみてないことを示しているといっている。ヤブ君は同書をめくつてみたかも知れないが全く読んでないことは同書を読んだ人には明白であろう。ヤブ君の全文は「他党派を正當に批判することができない人間は相手の理論を全面的に歪曲した上でそれに攻撃を加える」というセクト的下劣さの現れの完成した見本である。彼にはマルクス主義の問題について二三項目の初歩的（根本的）誤りがあるが、ここでは筆記時間の関係から十四項目について問題としよう。

(その一)
ヤブ君の大学斗争論なるものが「市民社会」総資本の要請に従

七月二五日東拘より

夏目三石

う精神労働者の矛盾」なるものについて一般論、存在論的に「述べる」ことではないかということとは彼の（二重の意味での）小文の中に18回も隷屬という言葉が使用されているにもかかわらずそれらが全て平板的にしか述べられていないこと表われており解放派諸君の運動なるものが賃労働と資本の矛盾を自覚す

る（それも一面的は）運動でありそれ以下でもそれ以上でもないことは民膏だつて知つてゐることである。まずヤブ君が同書を全く読んでないことの証明から入ろう。彼は東大生らしいのでマル学同中核派東大支部の「われわれの『大学斗争』論と東大斗争の路線」（同書110、122ページ）から引用する。

まず大学の位置について。「資本制社会特に帝国主義段階における大学の位置を解放派のように直接的生産過程および労働市場からの直接的類推的アテハメによつて矮小化一面化するのではなくてより總体的に把握し……すなわち資本制社会における大学とブルジョワ社会の支配イデオロギー・諸科学（特に社会・自然科学）の産出、産業社会、個別資本に直接従属せられる諸科学・諸技術の産出（以上を一括して大学の研究機能的側面ということもできる）およびその実体的担い手（ブルジョアイデオログ、高級官僚、政治的エリート、科学者、技術者、企業管理者等々）の産出（教育機能的側面）、一言でいうならばブルジョアの社会秩序そのものの再生産の一环として存在している」として基本的に位置づけ歴史的には「……かかる資本制的

生産関係を基礎とした資本制的商品経済を本質とする近代ブルジョア社会は産業資本主義段階||自由主義段階において政治的・イデオロギー的の上部構造を傾向的に分離しつつ経済的に純化する方向を示すのである。こうしてブルジョアの学問諸科学は諸科学はブルジョア社会の個別的経済的利益から相対的に独立した発展の基礎を与えられるのであるがそのことをさらに詳しくみよう……

「第一に『個の解放』『自由』『自我』の確立……」 「第四は：かくして一方でブルジョアがブルのみならず旧封建社会における一切の被支配階級をまき込んで遂行されることに規定されて全人民を『市民』と総称し『市民』の自由平等||ブルの個の確立が鼓吹され、政治的||法的にもそれが保障されること、他方では諸科学が封建社会のイデオロギーから解放されて初めて成立することを通してかつ自由放任の思想が風びすることによつてブル自身の意識の中に一切の学問、科学の研究||教育をブルの個別利害からも独立させることがとりもなおさず社会の利益であるという確信を生み出したのである……」 「もちろん、学^の独立^がブルによつて容認されるということは学問諸科学・諸技術が超階級的であるということを意味しない。人類の自律的原理としての社会生活の生産||再生産活動が資本制商品経済という疎外形態をとつて行なわれている現代にあつては個人がいかに普遍の人類社会のためという主観的意図をもとうとも、社会を維持し再生産するということとはとりも直さず資本制生産関係を維持し再生産するということであり……、さらには過去の方法を無批判的に継承する……」

*ブルジョアのことをブルと略して書きます。

いうことは過去の学問の内容(学問そのもののブル的誤謬)を多少かれなかれ受けざるを得ないである。……」 「しかしながら資本主義の自由主義段階から帝国主義段階への段階的移行は資本制商品経済による自律的調整機能が喪失することを基礎に学問が直接産業社会、ブル国家に從属せしめられる傾向を生みだし学問そのものが独立性、全体性を失なうことと大学の大衆化マスプロ化大学の資本制社会的位置の傾向的低下とが相互に媒介し合いながら一方で大学の破壊をもたらし総体として大学の非大学化、定された大学自治の破壊をもたらし総体として大学の非大学化、[「]大学共同化[」]の非現実化をもたらし総体として大学の非大学主義段階における資本の有機的構成の高度化(その一契機としての技術の高度化) 国際市場競争戦からの要請は直接大学を支配し理科系においては教育と研究の機能を分離しつつ前者においては中級技術者の大量産出、後者においては資本(産業社会)に直接從属させられる研究、軍事部門に役立つ研究を行なわしめるという産学協同、軍学協同の方向に傾斜し、文科系においては一方で経営の誕生に象徴されるように帝国主義の時代における支配と管理と経営の「学問」「技術」およびその実体的担い手を大量に産出し、総体として学問の全体性と相対的独立性がいつさいの幻想を保ち得ぬまでに喪失し、さらには帝国主義特有の実利主義的イデオロギーがブル社会創成期における「自由・平等・博愛」の理念にとつてかわらうとするものである。」 「特に日本資本主義の特殊性はこの過程をさらに復相化された形でドラスチックに現出せしめる……」 「帝国主義の腐朽性に規定されて大学の相対

的独立性が失なわれ、大学の自治」と学問の自由が破壊されることに対する学生の即自的反逆が大学斗争の出発点であることは、その斗争が「大学の自治」、「学問の自由」の実力防衛として進められねばならないということを決して意味しない。そもそも自由主義段階での学問の自由それ自体がブルの諸イデオロギー（：現存秩序維持その他の法律及び諸道徳規範それらを総合するものとしての国家共同体イデオロギー）の一契機として粉砕の対象ではないということだけでなく、自由主義から帝国主義への移行は歴史的必然性をもつて展開されるのであり、したがって大学自治破壊も必然的なものであつて帝国主義の時代にその帝国主義国家権力に手をつけずに過去のブルの遺物の復活を要求することほどアナクロで非現実的で喜劇的なことはない。尤だ直接目に見える形で「真理の大学」として今までイメージされていたものが崩壊しようとしていること、それに対して大量の学生が反逆していること。この帝国主義の腐朽の認識はさらに帝国主義そのものの矛盾を察知する端緒的認識として意義をもつこと、学生の反逆の基底にあるインテリゲンチヨアの、良心は極めてラジカルな人間の普遍的解放へ向けての変革のバトスと知性を生む潜在的資質としてあることが重要なのである。」

以上少々長すぎたが、ヤブ君が「中核派は自己の闘い」の根拠である自分自身の矛盾を推象し……聖別し……云々」としか理解できなかった。

個所を1頁位にまとめて引用した部分である。ヤブ君にとつては以上の引用・文を貫ぬいている唯物史観と運動の弁証法を全く

みることができないであろう。帝国主義的現実へ学問の腐朽化イデオロギーの荒廃、大学の帝国主義的再編との間にドラヌチックな矛盾の展開を見学費値上げ、管理運営権、学内規約、名称変更機動隊導入等その矛盾の現象形態、斗争に起ちよがる契機は多様であつても根本的様因を帝国主義の危機の一つの体現として把握、現状に対して即自的に反逆する学生の下の反省の端緒として正しいスローガン提起するのが学生共産主義者の任務である。人間はマルクス主義者と生まれるのではないのである。

(その(2))

マルクス主義の「回復」と学問・大学についてのヤブ君の歪曲と無知……「すでに何度か述べたように「真理の大学」の八実現Vll学の解放は人間の普遍的解放の中でのみ可能であるがそれは同時に学問の確立はブル社会においてなされるがそれは生産と所有の分裂を基礎とした精神労働と肉体労働の分裂を前提にしている。それ故解放された未来社会（精神労働と肉体労働の分裂の止揚）において実現される学の解放とはとりもなおさず「学」そのものからの人間の解放でありブル学問と内容の異なる学問（ブルの学の体系から類増されるそれ）が形成されることでは本質にないのである（もちろんこのことは実体的な次元で理解されるべきではない。体系としての学問そのものがなくなるというのではなくその実践的行為の中における位置、物質的生産、あるいは肉体的活動総体との本質的關係そのものが問題なのである。）同時にブル社会において完成した概念としての大学もなくなる。類似したものは残るとしても本質的に異なるのである。」……

「今日我々がマルクス主義という形をかちとつている「哲学」経済学」革命論その他の分野における思想理論は人間の解放とそこにおける学の解放をかちとるための文字通り導きの糸たるにすぎず、ブルの学問の体系性に匹敵しうる学の体系としてあるわけではなく、ましてやわれわれが長い年月をかけてつくり上げんとして、未来社会の学問的営為とは質的に異なつてゐる。その上で学とは呼びえないし（注）このことと関連して今日われわれが大学斗争を通じて革命の誓を築いたとしてもそれはブル大学にかわつて何か新しい大学ができるということではなくて誓たるにすぎないのである。このことをあいまいにするのも問題である。（注）

もちろんこのことは場所的現在における「学問的」「文化的」行為を全面的に放棄せよとていうのではない。次章で述べるようにわれわれの新しい「学問的」「文化的」創造に向けての過度的任務としてのブル学問文化を全面的に吸収しなければならぬし、さらに部分的に契機的にはあるがブルの学問の限界を突破し転覆していかねばならないがそれはあくまでも限定的に語られねばならないということである。やはり主要な追求はブル社会の否定を媒介とした、人間の全体制護得へ向けての導きの糸たるマルクス主義の深化に限定されるであろう。

最後に具体的に述べるなら「人間解放の学」を開かれたものとしたその限定性を日々希薄化しその深さを日々深めるものとして「真理の大学」と呼びうるものはプロ権力を樹立した後の資本主義から共産主義（社会主義をその第一段階として含む）への過渡期に存在するだろう。引用が長すぎたがヤブ君の文が如何に

「批判」になつていないかはこれで明白である。マルクス主義のブルジョアジーへの批判の武器が大衆を把える（物質化する）し武器の批判にまで高められブルジョア社会（国家）の現実的転覆となるのである。

（その(3)とその(7)）

「全世界の全ての人々との人間関係が人間的なものとして変革されないうり自身を人間として獲得する」解放するということ事あり得ないという立場からは自身自身を聖別するようなことは起り得ない。僕は「戦略」の事はよく知らないがこれが「世界革命」ということの根底的な内容なのだと思つてゐる。スターリニズムというのは……、人間的結合の不充分性なのだ、分業（……）と私有財産の秩序の刻印を受けたそのようなものとして個人生活の対立を止揚してゐない不十分な人間の結合のあり方なのである。「国家は個人生活の対立のうちのみ存在し得るし、組織的団結の中に「個人生活の対立」を及んでいるが故に国家を止揚することのできない組織のあり方それがスターリニズムの土台なのである。」この引用文の中には五項目の誤りがある。第一は「戦略」について。社会諸関係の体制の発展の客観的合則性を把えその法則性に主体的に関つていくこと。そのみが科学的であり、即ち自由であり得るのである。戦後帝国主義世界体制の歴史的、経済的、社会的な位置づけを把握し、各帝国主義間、及び植民地・後進国との関係、同盟関係、支配関係から自国の資本主義打倒の過程を世界的、歴史的に位置づけることである。

第二には「世界革命」についてであり第一と相互に媒介しつつ

「世界を資本家諸団体で分割再分割した、即ち世界的規模における商品経済である帝国主義段階」においては革命そのものが必然的にインテリシヨナルな意義をもつものであり、またそれ抜きにしては自国におけるプロ権力の防衛のみでなく世界市場から孤立したものととして社会主義建設が全く問題にならないものとして扱えなければならぬ。(プロレタリアのことをプロと略します)

第三は「国家」についての一面的な規定であり「国家とは一が他の階級を支配する暴力装置である」というレーニン主義の規定がぼやかされて階級としての遠対性の問題が常にヤブ君においては個人の次元にまで低められている。

第四は「国家の止揚」についてであり第三と必然的結びつくだが「真の人間関係の回復」「人間の解放」を直接的な資本主義の否定が真の人間関係の全的回復としてあるという考え(幻想)を持つているというのである。資本制社会においてはプロの対象の世界の疎外、労働生産物からの疎外、肉体的労働における単純化、機械化、細分化として、又精神労働者における一面化、専門白痴化として、そして最も本質的には人間の生命活動としての自己の対象化が生きた関係ではなく死んだ対象物(資本)に労働者が益々全面的に支配されるものとして、そして、主体の客体化が益々主体(労働者)をその対象から相対的に貧しくするものとして過程する。封建社会においては人格的表現としてあつたものが近代ブルジョア社会においては政治的・法的な平等の保障として、即ち二重の意味で自由な労働者として人間関係の疎外の物的関係(生産関係)の疎外として具現化する。それゆえ真の人間

間的結合は主観的な「団結」云々としてではなく生産関係ブルジョア社会の現実的・転覆ブル権力の樹立という過程をとうしてのみ考察されねばならないのであつてヘーゲルが神からの疎外を止揚した方法(疎外された思惟におけるそれであつて結局は現実的には神への還帰でしかない)の批判におけるフオイエルバッハの問題意識さえヤブ君には欠けている。

人間的であるということは「青春宿の主人に道徳的説教をたれる」ことや「信心深い」ブルジョアに向つて節欲と隣人愛を説くイナカ牧師」でもなく「若い根つ子の会」的「人間の」つきあいをすることではない。最も階級的・革命的であることが最も人間的なのである。

疎外された人間関係(物的・生産関係)を实践的に転覆するため具体的な活動とその組織が問題なのである。それ故その方向で行動(生きる)する「人間」として「革命の立場」「自己変革」も。何と呼ぼうとかまわれないが生きていることが全ての人間にとつて根本的な問題なのである。そのことが自分を「聖別」することになるといふならそれでもいいのである。

第五はスターリニズムについて。ヤブ君の常用手段は原因不明(彼の勉強研究不足が原因であつて、彼にとつての原因不明)の病氣は全て「これはガンですナ、もうどうしようもありません」ということで片づけてしまうのである。「官僚的なるもの」「日和見的なるもの」その他「ナニカヨクナイモノ」には全てスターリニズムのレッテルをはれば問題が解決するのでは全くないのであつてそれは真の原因をおおいかくすものでしかない。「『反ス

「タの立場」の獲得なるものに自分自身をスターリニズムから解放したと思ひこむのは危険である」という理論的のみでなく論理的にも無意味な警告をいくらか発しても何の役にも立たないのである。カイホウ家の「ヤブ」医者はさらに悪いことにはその名医ぶりを表わそうとしてどこも悪くないケルン君を「13号」において「手術」したのだ。分業の止揚の問題はスターリニズムの一国社会主義の問題として、またコンミュニオン三原則をスターリニズムが意識的に否定することの意味、ソビエト社会主義共和国連邦を名のるソ連がソビエト制度を廃止したことについての歴史的革命論考察が必要なのである。スターリニズムについては前の手紙で若干書いたのでここではこれ以上書かない。さて「お返し」にブクロ医院のケルン医者がヤブ君を診察するのをみよう。「フム、フム、これは帝国主義段階における買収された労働貴族を社会的背景とした生まれながらの組合主義的体質をもつており「マルキシズム」の一部的偏食と消化不良と「レーニズム」の致命的栄養不足が原因ですナ。

病症としては機能的には帝国主義段階についての完全色盲および権力問題へのアレルギックで実体的には、二重の意味で脳なし（即ち革命戦略についてのパーとプロレタリアートの頭脳たる「前衛」の否定）でそれに規定されて組織の發育不良、虚弱児ですナ。治療としては軽症のときは「前進」「中核」「共産主義者」……の革共同機関紙（誌）や出版物を見るのではなくよく読むこと。重症の人はブクロ医院で荒っぽい治療（手術）が必要だがそれでも治らなければ結論は一つですナ。「自然法則の適用するに

任せよ」（弱者は滅びること）。これは「ブンド家」や「M」家「フロント家」「カクマル家」で起きている病氣とは根本的に違うものであり病名は「シヤカイミンシュユギ」でアル。（その(8)）

「次に「帝国主義」が極めて一面的、政治的に理解されているという点を指摘しなければならぬ。一語でいえば「市民社会論」の欠落ということである」。何とマア無知（無恥）もここまでくれば尊敬に値するといふものである。彼のいう「市民社会論」というのは彼の全文から推察して「資本主義論」のことであるが、帝国主義段階論の完全な欠落のサンブル的な文である。生産と資本の高度な蓄積、金融力頭支配商品の輸出にかわる資本の輸出が重要な問題となること、資本家諸団体による世界の分割と再分割としてレーニンの「経済の段階」としての帝国主義の規定について全く無知であり、帝国主義を「政策の傾向」として規定しようとするカウツキーの誤った理論についてのレーニンの批判についての無自覚である。資本論「産業的により発達せる国は、発展程度により低い国に対してそれ自身の未来像を示す」というマルクスの産業資本主義段階におけるそれ自身は正しい規定を超歴史的法則に歪曲したメニシヨビキや日和見派が何故国家権力の問題を正しく把握できなかつたかについて再勉強する必要があるのではないカナ。マルクスの資本論を資本主義の「原理論」であると同時に「産業資本主義段階論」として読むこと。封建的・後進的要素と最も発達した資本主義的要素の国際的規模と国内的規模混合（結合）の植民地は先進国になれないことの問題、不均等発展

と複合的發展の法則について無知だから日本資本主義發展史が把えきれない。そして帝國主義段階における農業問題、民族・植民地問題、戦争の問題、中間諸層の動揺と分解徹底した収奪、海外侵略のための排外主義、暴力性、官僚・軍事機構の異常な膨張、本質的には帝國主義の寄生性と腐朽性としての問題意識が完全な欠落の何れにしても、帝國主義を歴史的には資本主義から共產主義への過渡期として、死に悶える資本主義として現実的には社民とスターリニズムとの階級臣殺により典型的に延命しているものと把えねばならないのである。

(その9)

「『資本論』が「不足の否定（資本制的、私的所有の否定）」は生産手段の共同占有を基礎とした個人的所有を確立する」といつているのをたとえ予感的にはあれ理解することはできないだろう。社会主義的所有といわれているものの内容は全人民所有などというインチキものではないのであつて個人的所有なのだということをして……ルイ十四世は「私は国家である」と言つたが僕は「私は世界である」といおう」。ヤブ君の私的所有への未練が表現されているだけでなく共産主義についての無理解がある。ヘーゲル歴史觀の弁証法をマルクスが批判的に摂取した態度についても全く無自覚である。

資本制的私的所有の否定は共同占有を基礎とした個人的所有である。全人民所有である。彼が社会主義的所有は全人民所有をインチキであるいつてブツクサ言つて個人的所有を云々するということとは社会主義（マルクスが共産主義の第一段階と呼んだもの）に

おいてはあくまでも全人民所有であり個人的所有があるということとは所有一般があるということであり「水平主義」という「平等」があるということである。同様に、民主主義とは一が他を系統的に支配する制度であり（「民主主義とは国家である」）、ブルジョア民主主義はプロレタリア民主主義は民主主義一般の死滅（「所有一般の死滅」）なのである。それ故次のように言うべきである。僕は言う「私は奴隷ではない」。僕の孫は言う「私は国家ではない」。そして僕の十代目の孫（その時孫という関係があるかどうかかわからないが）は言う「私は世界である」と。

(その10) (その11)

「そうして彼らは国家権力によつて人間関係を変え人間を豊かにしてやろうというのである。これは悪名高き「二段階戦略」以外の何ものであるろう。こういう発想をするなら「民主連合政府構想」の方がどんなにリアリティがあるだろう」。社民マルダシの完成した見本である。ここには三つの誤りがある。第一は「国家権力」について。「どんな日和見派も資本主義の矛盾について語り階級斗争の必要性を主張する。だがマルクス主義と他を区別するのはただ一つプロレタリア権力の樹立に向けて一切の努力を集中するかどうかである」レーニン。ヤブ君の全文には「否定」と「止揚」について全く混同しているのがみられる。アナキストは国家を否定しようとするが止揚することはできない、それ故彼らは国家を否定することもできないのである。プロレタリアートは権力を奪取しても人間関係を変え、人間を豊かにすることは『できない』。だがプロレタリアートは生産関係を変え社会関係を変え、全被抑

階級を鉄の鎖から解き放つことができるのだ。関係を変え人間を解放するということは現実的にはどういうことであるか考察せよ。

即ち人間関係を変えるにはプロ権力の維持 \parallel 外国(一時的)からの防衛、ブルジョアジーの抑圧、ブルジョアの汚物破壊のための強制力の執行 ot であり権力(支配機関)と国家は依然として必要でありブル社会からの諸物も一時的には断承せねばならないのである。第二は「二段階戦略」についてでありスターリニストのそれはできあいの国家権力を使つて党がよくしてくれるということであり我々のいう権力奪取 \parallel 既成国家機構(権力)の破壊 \parallel ソビエト権力(プロレタリア支配)の樹立ということである。第三は「民主連合政府」についてでありこれは機會主義の問題及び民族共産主義の問題についての問題を含むが第二第三についてはスターリン主義の問題であり前の手紙に述べたのでここではこれ以上書かない。

(その(13)と(14))

「僕は自分の考えで他人を動かすのも嫌だが他人の考えで自分が動くのも嫌なのである」このいかにもノンセクト風なさりげない言い方に二つの誤りがある。第一は唯物論的認識論の問題で我々は自己の孤高的な思惟の発展で成長するのではなくあくまでも他との関りあい(実践的活動、思想斗争)の中でのみより正しい方向への成長をかちとれるのである。「全くの自然発生的運動はそのままでは必然的(ブルジョアジーが精神的・生産手段を掌握している時は)にブルジョアイデオロギーへの屈服で全運動が分

解or骨抜き化されるのである。第二は第三と関連して党のための斗かいと党としての斗いという問題である。星の教程ある思想の中で我々はマルクスレーニン主義が絶対とはいえないまでも最も正しい思想であると考えるものであり(科学的、客観的に)それ故我々はその正しい理論で大家を武装させ(プロレタリアートの側への獲得)ねばならない。矛盾が集中しているということは矛盾を矛盾として感じる大きな契機とはなり得るが即自的に矛盾を止揚する方向へは行かないのみでなく全く逆(自滅)の方へ向かうこともあり得るのである。我々は我々の考えで他人を動かさねば(その他人のためにも)ならないし(党としての斗かい)我々の考えで他人を全面的に獲得(党のための斗かい)せねばならないのだ。

ヤブ君の誤り23項目の中14項目については批判したが僕が引用しなかつた文中の残り8項目の誤りについては誰か暇をもてあましている人がやつて下さい。(いなければ僕が続ける)

「中核派は労働の疎外について無理解だ」と主張するヤブ君との低次元の論争には(精神的、時間的、ビンセンも)消耗したし次の筆記の時間には夢にまで見る可愛い子ちゃんを獲得(思想的にも)するための熱烈な手紙をたつぷり時間をかけて書くという非常にやりがいのある重要な楽しい任務があるのでこの長い手紙もこれまで。

乱筆乱文矢礼

七月某日小菅より

鈴木琢郎

同志諸君、暑い日が続いていますがお元気ですか？ 僕の方は下痢が続いて体重がグングン減少し、現在48kgとあい成りました。僕にはヘノホツン氏紫班病（カルシウム・ビタミン類が欠乏すると激烈な腸血管痙攣を起こす）という持病があつて、ビタミン類の栄養効率が非常に悪いので（その上生野菜などというものにはトンとお眼にかからない）ハンストをやつた後はピンチでしたし、現在続いている下痢と歯グキからの出血は若干無気味です。

さて、この前の自分の手紙を読み直してみたら「そういう発想をするなら民主連政府構想の方がリアリテイがある云々」という文章が入つたバラグラフは、現在の「日帝打倒」が「民主連合政府構想」と同じほどリアリテイがないということの単純な皮肉の積りだつたのが、そうではなく読めるので、真意を伝える必要を感じた。僕は別に日共に幻想を持つてゐるわけではないし、「国家権力」を「紛砕」しなくてもいいと思つてゐるわけでも断じてない。僕が日共に幻想を持つてゐないのは、一部の人達の「日帝打倒」に幻想を持つてゐないのと同様である。それでも現在の

「日帝打倒」にはリアリテイがあると主張する人に対して、若きマルクスの言葉を贈る。「神の存在証明は空虚な同語反復であるにすぎない。——たとえば存在論的証明の意味するところは次のことにほかならない。すなわちわたしが現表的に表象するもの

はわたしにとつては現表的表象であるV:」

ブルジョア社会は「陰然たる内乱」の社会であつて「社会革命」の可能性は常に現在している。だからと言つて常に政治革命が可能であるわけではない。「主観的願望」と客体的・主体的情勢の客観的認識とを混同した場合二つの有害な結果が生じる。第一に引き出した反動に抗し切れない。第二に現に「何をなすべきか」が不明確となつてしまふ。「帝国主義大学解体」と「日帝打倒」とは同一レヴェルの問題である（)と言われる時後者の問題がただちに生ずる。僕の意見をもつと正確に述べるために「実力斗争の必然性」について僕の考へてゐる事を書いてみたい。

僕はこの前の手紙で、最も「戦斗的」であると自負している「前進」派の人達が、実は「実力斗争の必然性」について充分に自覚してゐないという事を暗示しておいた。それをはつきりさせよう。「前進」派の人達はブルジョア社会の安定性は、諸個人がブルジョア・イデオロギーやら、スターリニズムやら、とにかく「イデオロギー」に頭を押えつけられている（実際にはそんな事はないのであるが）という所にあると考へている。もしそれが、真実であるならば、「意識」を変えればいいわけだから、その限りにおいては実力斗争の必然性はなく、ブルジョア・マスコミや「赤旗」に抗して政治煽動を強めればよく、せいせい時々派手な「政治的事件」を起こして衆目を集中させ、それを宣伝すれば容易に「革命」は起こるだろう。そうあつて欲しいものではある（それにしてもそうして起こつた「革命」は何と皮相なものだろう。そうした「革命」によつて一現現表的に何が変わるのか？

プロレタリア革命が人類の「前史」を画するものと言われるのは何故なのか？）だが現実はそのではない。ブルジョア社会の安定性は結局のところ他者を人間として欲しない諸個人の欲求の貧しさにある。人間の「存在」とは、現実的生活過程の事であり人間関係と活動の総体の事であるが、その中心軸をなしているのが欲求であつてそれがその人のイデオロギーを規定しているのである。人間は自分が欲求・利害に基づいて行動しているのを自覚していない。「大学の自治」、「学問の自由」のため「人民」のため「私は自分のために闘う」と公然と言つて見給え。もし、それにひつかりを感じるならば、なぜそうなのかを点検し給え。「自分のために」と言つて「利己的」であるように思われる、そういう自分とは何なのかを問い給え。そうすると実は「人民のために」という事の中に自分の私利私害が隠されていた事が解るだろう。なぜならば「存在」において同じ利己的な自分が「意識」の上で「人民のために」と思つても、事態は現実的には何ら変わつていないからである。真に自分のために闘わなければ、真に普遍的な闘いとなり得ない、この逆説的ではらしい人間の構造を理解し給え。マルクスが「新しい唯物論の立場は人間的な社会または社会的人間である」と言つた時、彼はこの事を言つていたので、僕はそれを踏まえて「私は（私個人において）世界である」と言つたのである。「存在」が「意識」を規定しているのであつてその逆ではない。単に「意識」の変革だけが問題なのではなく「存在」即ち日常生活と人間関係と活動の総体の変革が問題なのである。ここにこそ僕らの闘いが実力斗争でなければならぬ理由がある。

実力斗争とはブルジョア社会の日常性、即ちブルジョア的な歴史の進行を停止させ、僕ら自身の新たな人間関係と活動で時間の経過を媒介する。即ち自らの運命を自らの手に握らんとする僕ら自身の歴史を展開するという事である。こうした斗争の中でこそ真に欲求の発展があり、初めはブルジョア社会の現象的矛盾にしか敵対していなかつた人間関係がブルジョア社会そのものに、即ち「社会的隷属」そのものに敵対する階級的団結（真に人間的な人間関係となつていくべきもの）として形成されてゆくのである。「社会的隷属」を肉体につきささる苦痛として感受した諸個人が、「社会的隷属」の一つの結果である「個人生活の対立」を克服し、真の「自己変革」を即ち人間関係と活動の変革をなしとげて一つの団結を形成する事によつて初めて階級対立が現実的に発生するのである。こうしてブルジョア社会の真つただ中に、精神労働と肉体労働の分裂を現的に止揚しつゝある団結と共同体「新しい社会」が形成されていく。これが「社会革命」の内容である。社会革命は政権奪取の後に始まるとするのがスターリンの定式であるが、僕の見るところでは解放派を除くすべての党派は、このスターリンの定式に則つていようと思える。（そうでない場合は反論されたい）「共産主義とはわれわれにとつて成就されるべきなんらかの状態現実がそれへ向けて形成されるべきなんらかの理想（それがどんなに「科学的」であると言われるにせよ——私）ではない。われわれは、現状を止揚する現実の運動を共産主義と名づけている」。（『ドイツ・イデオロギー』）この言葉を徹底的に理解すべきである。「国家や社会的編成はたえず特定の諸

個人の生活過程から生まれてくる。」(同)だから諸個人の現実的生活過程(人間関係も活動の総体)を資本の社会的な力に対決する事によつて現在の改革していく事階級形成こそ、資本制社会を「革命的」な方法によつて手つとりに早く改良しようと思つている「人民」にとつてはいざ知らず、資本制社会を根底から転覆する事を運命づけられている労働者階級にとつては唯一のリアルな戦略方針であり、そういう土台の上に立つてこそ真に「国家」を實力で打倒する道が開かれる。だから僕は現在の権力の問題を問題にすべきではないなどと言つてゐるのでは断じてなく、こうした「階級形成」の中から作られる量的にも質的にも「普遍的な団結」の形成(党はその結果的な表現である)なくしては、実践的に権力の問題を問題とすることができないと言つてゐるのである。こんな風に言うときサンディカリストだなどという諸君に、マルクスが「革命の錬金術師」を批判した言葉も返してやろう。「少数者は、批判的見地のかわりに独断をおき、唯物論のかわりに観念論をおく。彼らは現実の諸条件ではなしに、純粹意志を革命の原動力とみなす。われわれが労働者でむかつて、諸君は諸君の環境を変えるためだけに、また諸君自身をもかえ、政治権力の持主となるのに必要な資格を養うために、一五年、二〇年、五〇年にわたる内乱と国民戦争とを経過しなければならぬ、と言ふ時に諸君は、反対に労働者という。われわれは、いまずぐに権力を獲得しなければならぬ。もしそうしないなら寢床にはいつて眠つたほうがいいだろうと。：民主主義者が人民ということばを聖なる実体に変えたのとちようど同じやり方で、

諸君はプロレタリアートということばを聖なる実体に変えた。」僕はプロレタリアート独裁を断固として承認する。僕が承認するのは「個人的所有」の意味も理解しないようなプロレタリアートの代表者を僭称する「党」による独裁である。(なお『左翼小児病』を引用して反論しても無駄である、という事は言つておく念のため)プロレタリアートはいかなる意味においても「団結」の力を代表者に委ねてはならない。そういう点でこそ、議会議主義は批判されなければならぬ。先に述べた「階級形成」が、どれほど深く広くなされてゐるかという事が、「独裁」がどれほど過酷なものになるかを規定する。ファシズムと「五月革命」の敗北から学ぶべき教訓は「階級形成」を政治危機に至るまでに、できるだけ深く広くやつておかなければ、現象的には強靱な国家権力を粉砕する事ができないという事である。これは困難な道ではある。しかし困難に直面した時には、より一步斗争自体が革命的に根底的にならなければ、むしろ斗争が大衆化しないというのが僕が東大斗争から学んだ革命の弁証法だつた。まさにこうした困難な闘いの中からこそ、自分がこの広大な世界である事を実感し、全面的に発達しようとする(人間の発展とは人間関係が現実的に豊かになつていくという事である)やみ難い欲求を持つた個人が多量に産出されるのであり、そうしてこそ無名の一人の死が、『白痴』のイポリットの言うような「除け者」になる事にならず、世界史の全体的な展開を変える事になるような、とてつもない共同体の建設が可能なのであり、そうしてこそ人類の「前史」を宿命のようにして貫いていた人間の一切の私的性格を止揚した一個

人的所有」の再建（この前「確立」と訳したが原文は *restoration*）となつていたので訂正する）が可能なのであり、そうしてこそ資本制的生産様式が全面的に廃棄され得るのである。これがプロレタリア革命が人類の「前史」を画すると言われる所以である。

これは余談であるが、丸山真男氏は「非日常性が日常化する事はあり得ない」と「共斗会議」を「批判」したそりである。何たる腐りはたブルジョア・イデオログぶりだ。バリケード、それは僕らの日常性であり、僕らの社会であり、僕らの歴史である。旧い社会の中に新しい社会が生まれ成長して行く事を理解できないこの悟性的な思考の持主に対して「共斗会議」は真の弁証法の何たるかもその頭に敲き込んでやらなければならぬ。これもまた余談であるが、僕を取調べた素野人の刑事は、僕を東大生であると推定して丸山氏どころか、加藤氏までも「代々木の手先」として警戒し、嫌悪の情を現わしていた。まさに見事な感覚ではある。彼らは僕らの「危険性」に対しては無自覚だった。それで、その時僕は現在の歴史的位を窺い知る事ができるようになった。ロシアの革命史にもこういう一時期があつた。つまり現在は「ナロードニキ」と「マルクス主義」の交替期なのである。詩的には逆転するとしても散文的には代々木の方がナロードニキよりははるか優秀であろう。そしてその分だけ僕は当時のロシアのマルクス主義者よりも優秀でなければならぬのではないだろうか。スターリン主義を下向的に分析して辿りついた「外部からの意識のもちこみ」論はレーニン主義の最も基本的な原則であり、反マルクス主義的であるという解放派の人の指摘は正しい

と思うが、もう一步下向すべきであるように思われる。その原則は実はレーニンが「社会的隷属」の問題をはつきりとは把握してはなかつたという事の理論的結果であり、その事はまた当時のロシアに「市民社会」が十分に成熟してはなかつたという事の結果である。それは『帝國主義論』にも現われている事であつて『資本論』と読み比べてみた場合それを発見する事は困難な事ではない。「社会的隷属」の核心的な問題は、それが「個人生活の対立」として現われるという事である。これが、東大斗争の過程で「自己否定」を必要とするようなうしろめたさの問題として予感され、後により発達した人間にとつて苦痛として感受された問題である。とてもつもない共同体」の構築によつて全世界的な規模でこの「個人生活の対立」を止揚する事こそ人間解放の核心的な課題に他ならない。だからそれは必然的に永続革命である。これは階級対立の止揚という形をとるのであるが、出発点は「個人生活の対立」の止揚なのだという事を僕は強調しておく。何も資本家と労働者だけが敵対しているのではなく（資本家と労働者との関係は単なる敵対ではなく隷属である）通常の状態においては労働者個人同士が対立・競争して、人間として関係し合つていないのである。資本の社会的な力に対決する事によつて労働者が自分達同士の対立を克服し、一つの団結を形成する事によつて初めて階級対立が現実に発生するのである。人間が「自己変革」へと駆り立てられるのは、自分の内部に矛盾を感じるからであるが、（苦痛・不安等々の「否定的感情」として）「人間が自分自身と対立する場合、他の人間が彼と対立しているのである。」

（『経哲草稿』）からして、また「問の疎外、一般に人間が自身自身に対しても一切の關係は、人間が他の人間に対しても一切の關係においてはじめて実現される」（同）のであるからして、「自己変革」とは単に自分の「意識」を変える事ではなく、人間關係を変える事なのだといふ僕の返す命題に注意を払うように訴える。それは主体に注目して言えば、欲求を変える事であり、感覺を変える事である。なお『経哲草稿』から引用した命題から解る事は、共同性に対して他者に對して不信を鳴らす人は、自身自身を信用してはいないからぞといふ事を言つておく。それは、他者との關係を實踐的に変革する事によつてしか解決され得ない。「外部からの意識のもちこみ」あるいは「理論」によつて大衆を獲得するといふ発想は結局、デオロギーの人間支配を前提にしてゐる觀念論である。人間はどんなにそう見えようと「理論」によつて動いてゐるのではなく、欲求によつて利害によつて動いてゐるのである。「理論」は、その事を対象化するという契機を孕んでいなければ、実践の中で血肉化し得ない理論的理論に過ぎない。僕がこの前の手紙の中で問題にしたのは「帝國主義大学解体」といふスローガンを掲げざる利害は何なのか、といふ事であり、中核派の人達を斗いへと取り立てるエネルギー・欲求・利害が何なのかといふ事だつた。そういう問題関心からすると、『大学斗争』の中でトウトウと展開されている大学の位置付けは、斗いの基底にあるのが「インテリゲンチヤの『良心』」なのだとする（そうでなければ「帝國主義大学解体」といふようなスローガンが掲げられる事はない）実践の中に織り込まれる事のない理論的

理論に過ぎないのであつて、だから僕は考慮する必要を認めなかつたのである。なぜなら「インテリゲンチヤの『良心』」が、あるいは「良心的」なインテリゲンチヤが認識する、帝國主義の矛盾なるものは、自分にとつて苦痛ではないのであるからして、自分にとつての矛盾ではないのであり（人間にとつて苦痛でないような矛盾とは何か）、従つて「人民」にとつての矛盾なのであり、従つてそこで展開されている一切の問題は、中核派に結集してゐる人にとつては外的な、血肉となつていない「理論」に過ぎないからである。精神労働と肉体労働の分裂の止揚は共同体の構築なくして不可能であるが、それは何か将来の課題ではなくして現在の課題なのだといふ事を指摘しておく。レーニンとローザでは「革命家」としてどちらが優れているかといふ事は、僕にとつてはどうでもいい問題である。両者はそれぞれ、未成熟な「市民社会」とより成熟した「市民社会」を理論的にかなり正確に反映してゐるに過ぎない。なお「市民社会」は資本主義の時代になつて最も成熟してくるとはいえ、物的な機構のように理解された「資本主義」の事ではない。「これまでのすべての歴史的諸段階に当然存在した生産諸力によつて規定され、逆にそれを規定しかえす交通形態とは市民社会のことである。」（『ドイツ・イデオロギー』）僕の理解では「市民社会」とは物に媒介されてゐるとはいえ、生きて人間關係の総体の事であり、人間の「生活」の総体の事であり、「社会的隷屬」の体系の総体の事である。レーニンは『大論理学』を読みながら「五十年間『資本論』は理解されなかつた」と言つたけれども、実は「百年間『資本論』は

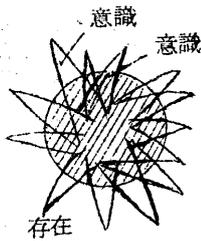
理解されなかつた」のである。そして、今や全世界的に『資本論』が大衆的に理解されうる土壌が形成されたようである。歴史はようやく『資本論』に反しない。一つの共産主義革命をその日程にのぼせたように見える。フアンスムに屈服する事によつて、相戦う階級の共倒れに終るか、それとも「とてつもない共同体」を構築し、宇宙に対して一つとなつた「人間的社會」を築き上げるか、同志諸君、世界の運命は、僕達と全世界の全ての斗う人々の双肩にかかつてゐる。

↓ 斗姿 1

PS 言ひべき事は言つた。

僕を「社民」だとか「サンデイカリスト」だとか言う諸君は、勝手にそう言い給え。僕は何ら痛痒を感じない。却つて僕の書いた事を理解せず、他者を人間として欲しない人達の人間の貧しさの方が僕にとつて苦痛である。なお僕を批判する事は「解放派」を批判する事にはならない。「解放派」の名替のために言つておく。僕は中核派の人達の戦闘性それ自体は高く評価しているし、スターリニストだなどと言つた憶えはない。ただスターリニスト的地平を越えていないと言つたのである。

なお、僕が「私は世界である」と言う時、僕が思い浮かべている表象を图示しておく。



この絵は球の断面として理解されたい。円の周囲からはみ出している三角形の部分は人間の「意識」であり、この球は人間の「存在」である。この「存在」は何か固定したもので

はなく活動として表われた人間関係の総体である。斜線の部分は一人の個人である。従つてこの個人は、個人において世界である。従つて一人の個人が変わる事は世界全体が変わる事である。マルクスが「人間、それは世界のことである。」と言う時思い浮かべている表象はこういうものだ。僕は考へている。

我々はある意味で、パリ・コンミュンにも似た立場に追いこまれている。保釈拒否はある意味で「武装なき武装蜂起」であり、

後 集 編 記

「階級形成」の現状から見れば「極左的」な方針であるよ
うにも見える。だが斗う方針
はこれ以外にはあり得ない。
先進的「被告」諸君の不屈の
決起を一点突破として、目ら
を階級へと形成することこそ、
獄内、外の「被告」諸君と真
に連帯した救対活動の任務な
のではなからうか。

ここに第18号を送る。長い論文を二つ採用した。我々はこういう論争の場を（——東大

斗争の切り拓いた地平と団結を更に深化、発展せんとする方向で（——）設定できることを歓迎する。

影 丸

第十八号 八月二十三日発行
発行者 「獄中書簡集」発刊委員会
加藤 二郎
連絡先 V 文京区向丘一の十二の七
東大追分寮内
電話 八一一 二三六八
真 崎 猛 哲

非売品・無断転載禁ず